

現代の中国文学

相浦 杲



NHKブックス

168

相浦 杲 (あいうら・たかし)

1926年 大津市に生まれる

1949年 京都大学文学部卒

現 在 大阪外国語大学教授

専 攻 中国文学

NHK ブックス 168

検印廃止

現代の中国文学

昭和47年10月25日 第1刷発行

著 者 相 浦 杲

発行者 浅 沼 博

印刷 三 秀 舎

製本 石 津 製 本

装幀 栃折久美子

発行所 日本放送出版協会

東京都渋谷区宇田川町 41-1

郵便番号 150 振替東京 49701

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします

現代の中国文学

相浦 杲



NHKブックス

168

序

私が中国語の勉強をはじめてからちょうど三〇年になる。その過程で私はしだいに中国文学の世界へひきよせられてきた。日中間の自由な往来がなかったこの時期に、私の言葉の勉強のテキストとなったのはたいい文学作品であった。だが、もちろんそのすべてを読みきることはできはしない。一生をかけても読みきることはできないであろう。

作品を読むことによって、私は中国人の魂にふれ、その生活や人情、怒りや悲しみや喜びや、さまざまな社会生活の細部を知り、思想や政治や歴史への認識の拡大を必要とするようになった。

私はこうして読んできた作家と作品、それについて私が知ったこと、調べたこと、全体としての文学の流れやその特徴、などについて、私の力の及ぶかぎり、ここにまとめておきたいと思う。ひとりの研究者にとって、それを文学史と名付けることは、まだおこがましいことである。資料的にも、認識の点でも、まだまだ不足だと思う。そのうえ、この大きな対象にもかかわらず、書物の規模の制限もある。しかしまた、ひとりの研究者の到達した里程碑として、中国の現代文学についての知識を少しでも得たいと願う人たちに参考の用をたすことぐらいはできるかも知れない。

私がここで、現代の中国文学、と言うのは、中華人民共和国成立(1949)から文化大革命のころにいたるまでの文学をさしている。この二〇年たらずの文学情況の過程を叙述し、再現するといつても、実際はそう簡単な作業ではない。現代という混沌の中に身を沈めながら、隣国に生きる同時

代人として、それへの、できるかぎりの接近をこころみたい。

現代文学の性格を明らかにするためには、その前の時期の文学の由来や沿革を知っておかなければならないが、この論理をおしすすめていけば、中国文学の全歴史過程や構造を説明しなければならなくなる。

しかし、周知のように、中国は数千年の歴史をもつてはいるが、中国世界が構造として全面的に世界史とかかわりをもつようになるのは、近代からである。この近代は、それ以前の長い封建時代と対立しながら、それとは異質なものとしてたちあらわれてくる。そして現代とは、近代の延長線上の、もっとも今日的な時期と考えてよいであろう。

中国では、阿片戦争(1839)から、中華人民共和国成立までの百十年間の歴史過程を「近代史」とよんでいる。しかし、文学史については、すぐさまそれと並行して「近代文学史」と呼んでいるわけではない。そこで、いちおう、次のような時期区分を提示しておこう。

- ①近代文学 一八四〇年(阿片戦争)——一九一四年(五四新文化運動直前まで)
- ②現代文学 一九一五年(五四新文化運動)——一九四八年(中華人民共和国成立直前まで)
- ③当代文学 一九四九年(中華人民共和国成立)——

この中で、③当代文学の「当代」という用語は、「今の時代」というほどの意味であって、「近代」「現代」に對置しうるほどの概念ではない。それは「現代」の中に含ませてもよいであろう。もちろん、ここではこれらの概念から出発して文学情況を説こうという意図はない。それは、たと

えば、わが国で、おなじ昭和期の文学であっても、それ以前とは事情のちがう時期の文学を「戦後文学」と呼びならわして区別をつけているのと似ている。

中国の長い古典時代の文学に対立して、近代文学があらわれてくるのは、内部的には清朝による封建支配体制の自己崩壊と、外部的にはいわゆる Western Impact——西からの強烈な衝撃とによって、社会や文学の質的な変革が促進されたことに起因する。阿片戦争はこの情況を集中的に象徴しており、近代史の時期区分のメルクマールとなるのである。そして、現代文学の最初の作家は魯迅であった。

本書はそういう意味で、近代文学や現代文学の流れや特徴についてもかなりの頁数をさいたが、重点は当代文学においた。そうする方が、歴史的な流れや性格を理解しやすいと考えたからである。煩をさけていちいち記さなかったが、この本を書くにあたって、内外の研究成果に負うところも多い。ここにあらためて、多くの先輩研究者諸氏に対する感謝の意を表したい。また、私にこの本をまとめるよう決意させ、昨年以來、ともすればひるみがちな私をたえずはげましてくださった、日本放送出版協会の田口汎氏、品川高宣氏に対しても心からお礼を申しあげたい。

近代文学の父は龔自珍だといわれる。その名を知る人はわが国ではまだ少ないかも知れない。「現代の中国文学」の話をそこから始めることにしよう。

一九七二年一〇月

目次

第一章 現代と文学……………九

1 近代文学の流れ……………一二

龔自珍—近代文学の胎動／伝統文学の様相／外国文化の受容／清末の小説論／清末の小説／翻訳小説／辛亥革命後の文学／現代文学への準備

2 現代文学の成立と発展……………三二

『狂人日記』——現代文学の最初の作品／『新青年』と啓蒙運動／五四新文化運動／現代文学と五四新文化運動／文学革命の提起／文学革命と新しい作家たち／五四退潮期と新しい文学情勢／文学研究会／創造社／さまざまな動き／革命文学のはじまり／創造社の方向転換／『語絲』と『現代評論』／魯迅と進化論／老舍・丁玲・巴金

第二章 文学とレジスタンス……………六二

1 革命文学と左翼作家連盟……………七三

大革命の失敗と文学／革命文学論争／最初の長編小説／茅盾と現実／聞一多と格律詩／左翼作家連盟の成立／三〇年代の作家と作品／

左連の運動

2 抗戦文学を中心として……………七

国防文学論争／抗日戦争勃発後の文学情况／抗日戦と革命戦期の文学／国府支配地区(1)―新たな成果／(2)―郭沫若・茅盾など／(3)―巴金・李広田・老舍／(4)―夏衍・丘東平など／解放区の文学(1)―丁玲の作品／(2)―大衆化の問題点

第三章 労・農・兵の文学……………七

1 「文芸講話」以後……………九

延安文芸座談会／『文芸講話』の示した道／文芸思想と文芸創作の問題／『文芸講話』の実践／丁玲文学の発展／新しい作家の出現／『白毛女』の創作過程／民族形式の作品群／土地改革を描く二つの作品／二つの文学批判(1)―「主観論」批判／(2)―蕭軍批判

2 農村作家と労働者作家……………二三

農村を描く趙樹理／農業協同化を描く『三里湾』／工場を描く作家たち／『鉄水奔流』と周立波／『百煉成鋼』と艾蕪／『乗風破浪』と草明／胡万春の生い立ち／新しい世代への継承／新しい造型・『特殊性格の人』

第四章 当代文学と文化大革命……………一四九

1 文学の情況―作家と作品……………一五二

組織と雑誌／作品の情況／ブチブル的傾向と作品の概念化への批判
／農村に題材をとる作品／作品の主人公／『清宮秘史』と『武訓伝』
批判／第二回文代会と社会主義リアリズム／作品の情況①／『紅
樓夢』研究批判／胡風批判／作品の情況②／丁玲批判／詩人・毛沢
東／茅盾のリアリズム論―『夜読偶記』／作品の情況③／第三回文代
大会／作品の情況①短編小説／②長編小説

2 政治と文学体制……………一五〇

第一回文代会の特質／第二回文代会と社会主義リアリズムの提
起／百花齊放・百家争鳴と反右派闘争／革命的リアリズムと革命的
ロマン主義の結合／第三回文代会の特徴／反右派闘争での劉紹棠
批判／第三回文代会後の情況／題材決定反対論と中間人物描写論
／毛沢東の文芸批判／現代京劇の出現／文化大革命の予兆／毛沢東
思想と『欧陽海の歌』／『海瑞罷官』批判／形象思维論批判／『燕山夜
話』と『三家村札記』／周揚批判と文化大革命／文化大革命後の文学

第一章 現代と文学

1 近代文学の流れ

龔自珍——近代文学の胎動

近代の胎動に対して最初に鋭敏に反応した文学者は、龔自珍（1792—1804）である。その生涯は阿片戦争前夜に送られたが、後の、改良派

といわれる康有為、譚嗣同、梁啓超や、民族革命派の「南社」の詩人たちに大きな影響を残した。彼は清朝・小学の大家である段玉裁を外祖父として、浙江省、杭州の学者の家に生まれた。「我が生は之を天に受け、哀楽恆に人に過ぎたり」と自ら言うように、感受性の鋭い人物であった。

「自珍、余に呉中に見う。年纔に弱冠なり。余、業りしところの詩文を索め観るに甚だ夥く、間、經史を治むるの作あり、風発し、雲逝き、一世を不可とするの概あり」（段玉裁『懷人館詞序』）と、祖父をして嘆ぜしめたほどであった。

二八歳の頃から公羊学を常州の劉申受到に学んだが、この常州学派は、經書の解釈について現実の政治を重視する立場をとっていた。それは変革の理論を説くものであり、「窮まれば則ち變じ、變ずれば則ち通じ、通ずれば則ち久し」という、歴史を發展として見る立場は、封建体制を永遠に不動のものとしてしか認識できなかった当時の正統派や一般の觀念と鋭く対立していた。また一方、官僚として出世できなかったことは、彼に、酒色にふけること、仏教に帰依すること、隱者として田園生活を送ること、などさまざまな人間的苦悩をその詩文に反映させている。

後に梁啓超は、「自珍、性、跌宕にして細行を検せず、頗る法（フランス）の盧騷（ルソー）に似た

り、「晩清の思想解放に、自珍、確かに与りて功あり」（『清代學術概論』二三）と評している。封建体制のもつ欺瞞の尖鋭な暴露、変革を予見する危機意識、人間としての憂愁、それらは詩文となつて噴出したが、その散文は難解な独特の文体を形成し、詩もまた特異で新奇なものであった。彼はこの新しい内容と文体によつて個性を確立した。そういうわけで、われわれは龔自珍を近代文学史の最初に位置づけることができるだろう。

伝統文学の様相

伝統文学は、詩とノンフィクションの散文とによつて支えられてきていたが、清代朝以来の、内容空疎で極度に装飾的な四六駢儷べんれい体を廢し、周・漢の古えに帰れ、と主張し、周・漢時代の散文を取捨選択して再生した達意を旨とする文体であった。「桐城派」はこの古文の流れをうけつぎつ、清代には安徽省・桐城の出身である方苞にはじまり、姚鼐ようだいにうけつがれ、曾國蕃そうこくはんを経て民国初年の吳汝綸ごじゆりんや章士釗しょうししょうにおよび、清朝を通じて民国初年にいたるまで文学界の主流を占め、「天下の文章は桐城にあり」とまでいわれた。その主張は「義法」を重んずることにあった。「義法」の内容は、作家によつてニュアンスは異なるし、時代とともに変化はあるが、要約すれば二点あり、

① 「文は以て道を載す」（「文以載道」：宋・歐陽修の語）の主張

② 創作における「神・理・氣・味・格・律・声・色」の八点の重視（姚鼐：「古文辭類纂序目」）であつた。桐城派の開祖、方苞が「学行は程・朱の後を継ぎ、文章は韓・欧の間にあり」と述べているのを見ると、その思想内容が朱子学であり、文の修辭は韓愈、歐陽修を目ざしていたことがわ

かる。

①は、文は「道」をはこぶためのものだ、ということ、つまり、「道」のための文学の主張である。「道」とは、時間的には永遠を、空間的には普遍をもつもの意識されてきていたが、その内容は封建時代に則していえば、程・朱の学であり、儒教イデオロギーにほかならなかった。

②は、散文の創作には、雰囲気・リズム・色彩……などがなければならぬとする主張であり、用語の厳格な選択が要求され、俗語の使用は認められなかった。ヨーロッパ文学とは歴史も背景もちがうが、あえて桐城派を古典主義にみたててならば、龔自珍はそこであって激しくロマン主義に傾倒し、中国「古典主義」打倒の先駆者の道を切り開いていた。

桐城派のほかに、「文選派」があり、六朝時代（三—五世紀）の駢儷体を模倣したが、陳腐なレトリックに陥っていた。詩では、宋以来の黄庭堅に始まる「江西派」が主流を占めている。しかし、明代の唐詩尊重に反撥しておこった清代の宋詩尊重もまた一つの形式主義に陥っていた。龔自珍の切りひらいた道をすすんだ黄遵憲は、その詩（「雜感」其二）で「我が手もて吾が口を写さん、古も豈に能く拘牽せんや」と、言文一致の觀念までもつようになっていたし、それにつづく夏曾佑、譚嗣同、梁啓超らは詩界革命の主張をするにいたるのである。

以上のような桐城派、文選派、江西派の三つの派が十九世紀の中国文学を支配しており、詩と散文だけがまともな文学だとみなされていて、フィクションや演劇は一般に「大雅の堂に登らぬもの」とされていた。

しかし、これらとはちがった局面がしだいに現われていた。道光・嘉靖年間の詩人として知られ

る張維屏^{ちやういへい}は、阿片戦争に際して、その戦場となった広州・三元里の平英団の戦いを「三元里」と題する詩にうたい、また、壮烈な戦死をとげた三人の將軍について、「三將軍歌」をつくった。これらには従来見られなかった愛国主義の高揚がある。さらに、一八五〇年から十五年間にわたる「太平天国」運動は、中国史上、最大の農民革命であったから、その文化政策は、当然、文章における俗語の使用、詩韻の改訂、文字の改革などを指向することとなった。その指導者である洪秀全、楊秀清などのかいた文や、宣伝用の歌が農民にわかる俗語を用いたばかりでなく、農民・兵士自身による歌などもたくさんつくられて、「文学大衆化」の芽生えをみることができる。

外国文化の受容

中国近代の場合、外国文化の受容は、伝統思想や現実政治とからみあってさまざま、まなニュアンスをもちながらも、かなり興味ぶかい段階別のパターンをもつ。それは「洋務論」と「変法論」である。

阿片戦争や太平天国運動、さらにアロー号事件(1856~58)などのショックによって、一部の知識階級は西洋の機器・技術をとりにいれて軍備を充実させ、中国の自強をはかるう、と考えるようになった。これが「洋務論」である。それは伝統思想からみれば異端であり、この矛盾を説明するために、西洋の機器・技術は原理的には諸子百家にすでにその源流がある、というような考えさえあらわれた。これに対して、西洋の富強の根底には、機器・技術以上のものがある、それは西洋の政治のあり方だと考え、経書や諸子(ことに墨子)に溯ってその原理をさぐり、理想化した中国古代¹¹西洋近代、という等式を設定しながら西洋の政治のあり方を学ぼうとしたのが「変法論」である。したがって変法論の立場は機器・技術よりも中国の政治・制度の改革こそが根本だとした。

この立場がもつとも強くなるのは日清戦争(1894~95)のころであり、その中心的な指導者であった梁啓超らが戊戌政変⁽³⁾に失敗し、変法論の改革運動は終りを上げることとなった。しかし、変法論は、義和団事件(1895~1901)の頃からは、政治・制度ばかりでなく、倫理をも革新の対象としてとりあげ、ことに「進化論」や「民約論」の影響を受けながら、社会倫理の確立や民族性の改造などをも論議するにいたっている。

古い伝統文化をもつ中国の西洋文化受容のタイプは、いわば「和魂漢才」型なのであり、「中体西用」という言葉であらわされていたが、「洋務論」から「変法論」へと受容は深化していった。

「洋務論」も「変法論」も、政治的には、崩壊に瀕した清朝封建支配体制を強化する作用をはたすこととなり、戊戌政変も光緒帝を擁する立憲君主制の確立を目ざすものであった。今日、これらを「改良派」と総称するのはこのためである。しかし、文化的には、改良派の運動は、後の「五四新文化運動」にひきつがれ、大きな有効性をもつこととなる。

なかでもダーウィンの「進化論」は、それがヨーロッパの近代に対してはたしたのと同じような役割りを中国においてはたした。進化論の導入は直接にダーウィンの著書を通してではなく、ハックスリーの『進化と倫理』(Evolution and Ethics and Other Essays)とその序説「プロレゴメナ」が厳復によって『天演論』という標題で翻訳(1894)されたことにはじまる。厳復は軍事を学ぶために四年間イギリスに留学したことのある人だが、桐城派の流れをくむ古文家で、その訳文は古雅・難解であったが、西洋の新思想を伝えるものとして変革期の知識人に迎えられた。「天演」(進化)、「物競」(生存競争)、「淘汰」、「天秩」(適者生存)などの語は、阿片戦争以来の欧米列強による分割・